



昨年、東京国立博物館で、日伊国交樹立 150 周年を記念して、世界初公開の伊東マンショの肖像画の特別展がありました。伊東マンショ(1569?-1612)は九州のキリシタン大名である大友宗麟(1530-1587)達の名代として、1582年にローマのバチカンに派遣されました。四人の(天正)遣欧少年使節団の正使でした。彼らは長崎を出港し、中国、インド、ポルトガル、スペインを経て、1585年にイタリアに渡った初めての日本人です。ティントレットによる 16,7 歳ころのマンショの姿を見られるとは大変な驚きでした。お嫁ちゃんのるりちゃんがぜひ見ようと勧めてくれましたが、残念ながらこの時は出かけられませんでした。

夫の母方の家系図によると初代の大友能直の三代目が分家して初代となった記録がありましたので、大友宗麟とも細い微かな繋がりがあるかなと、ロマンを夢んでいます。また、キリスト者として、キリシタンは記憶に留めるべき大切な人々と思っているのです。



今回、東京富士美術館で「遥かなるルネサンス」展があることを、るりちゃんが教えてくれました。丁度、お見舞いしたい方が八王子にお住まいなので、早速出かけました。マンショは勿論のこと、マンショたちが目にした当時のイタリアの各地の文化、マンショたちを迎えた王侯貴族、バチカン、また、マンショたちを観察した当地の人々の関心ぶり等、まるで一緒に出掛けて回っているような展示の仕方、マンショたちの気持ちと一緒に、450 年前のイタリアを巡る展覧会となりました。

当時、日本はザビエルが 1549 年に宣教を始めて 30 有余年、キリスト教は宣教活動が広がり、九州では神学校が出来ていました。1582 年と言えば、本能寺の変が起こり、キリスト教の布教を認めていた織田信長が殺された時でもありました。戦国時代のピークとっていい時でした。

イタリアでは宗教改革の嵐が静まり、カトリックはそれなりの自浄の改革をし、力を持って、大航海時代の波に乗って、世界宣教を拡大していた頃でしょう。日本という東の果ての未知の国からやって来た、キリスト教徒である初々しい若者たちは、どれほど驚異の目で、また歓喜、感動の目でみつめられたことか、と想像します。また、マンショたちもどれほど驚異の目でイタリアを見たことでしょう。都市、港湾、交通、軍備、建造物、宮廷の文化、バチカンの権威など、日本との大きな違いを感じたことでしょう。けれども記録によれば彼らは高貴な身なりで、品位ある振る舞いで、親しみ深く、堂々としていたとのことですから、大名の名代の自覚をしっかり持っていたのでしょう。

私にとって特に興味深かったものは、当時の世界地図、またマンショの自筆の手紙、イタリア、バチカンに残された記録の数々です。いかに遣欧使節がヨーロッパにとってビッグ・ニュースであったかが分かります。彼らは丹念に記録を取り、それを保存し、検証しているのです。マンショの何通かの見事な筆跡の手紙が残されています。その書きだしに「天地万物乃御作者又其御子我々御扶手・世主子乃以御合力、令染筆候」とあり、マンショの信仰が偲ばれます。帰国後、彼らにはキリシタン弾圧の運命が待ち受けていたことを考えれば、あまりにも残念です。



天正遣欧少年使節記念メダル (1585)



ヨーロッパ内外にセミナリオを設立するグレゴリウス 13 世



ヴェネツィア共和国への感謝状